

弾直樹の四男、弾慎平が興した東京皮革製造所については、「靴の歴史散歩」⑮から⑳にかけて連載してきたが、クロムなめし^{びそ}の鼻祖として、光彩を放った人だけに興味は尽きない。

リバティおおさか 大阪人権博物館の元学芸員だった太田恭治さんとは、三十年以上も前からの友人で、年に二、三度、東京に出張したりする時には、必ず出会い、食事を共にしたり、情報交換を欠かさない仲である。

今年の一月、その太田さんから「稲川さんが追いかけている弾慎平さんの肖像写真が、国立国会図書館関西館の収蔵書籍の中から見付かったので、いい状態のコピーを手に入れるから、楽しみに待ってて……」といううれしい電話が入ったから舞い上がってしまった。



写真1

送られて来た資料によれば

『大日本皮革及皮革製品業大鑑』

出版社は、東洋皮革新誌社篇、発行年は明治44年12月とあった。

インターネットでの公開はしていないそうだが、何とか全体像を把握したいものである。

初めて対面した弾慎平の肖像写真は、フロックコートに身を包む礼装姿で、父親の弾直樹を彷彿とさせる、中肉中背の堂々たる好男子であった。(写真1参照)

工場の写真は、条件の悪い屋内にも関わらず、鮮明に撮られているが、小さい写真なのが惜しまれる。(写真2参照)

新資料が出現したので、ご紹介しましたが、次回より「靴の戦後史」を再開します。よろしくご理解下さい。

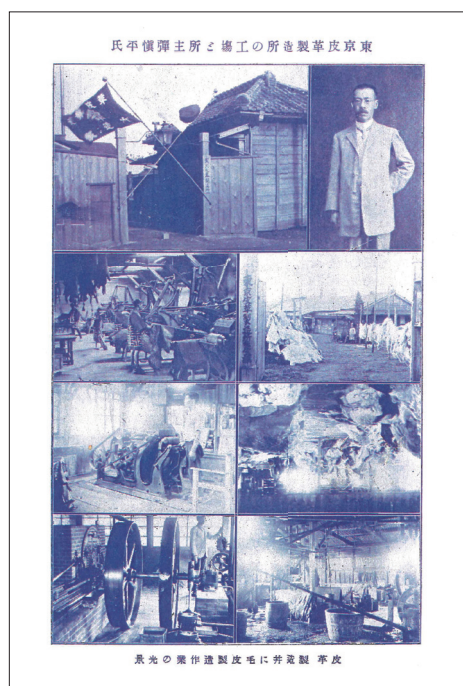


写真2

資料提供：国立国会図書館